

後藤新平伯を偲びて

法學博士
農學博士

新渡戸稻造 著

後藤新平伯を偲びて

岩手學生會發行

目次

後藤新平伯を偲び……………	新渡戸稻造…一
故郷……………	新渡戸稻造…三
後藤伯の思ひ出……………	田子一民…四

後藤新平伯を偲び

新渡戸稻造

一

齋藤子爵は御幼少の折から後藤伯とは御親厚の關係もあつたが爲に、殊に伯の若い時代、即ち諸君の年輩であらせられた頃の色々な想ひ出も、御話になるであらうと期待して居りました。齋藤さんは只今の御話もありました如く、多勢の前で昔話することは御好みにならぬと云ふことであります。御尤な次第なことで、其處が齋藤さんの齋藤さんたる所で、不言實行と云ふ性格の方である。一寸御目にかゝつても、其の趣が直ちに我々の心に響くのであります。其處が齋藤さんが國家の爲に甚大なる御奉仕をなされた人であると思はれるのであります。それに反して私は唯

喋べるばかりが能でもないが、私の活動の範圍であつて、別に大いして……手で爲したと云ふこともなければ、又足で、足は少しく遠方迄行つたけれども……是と云ふて誇ることもないのであります。人は銘々に其勤むる途が違ひますが、私は只今申した通り自分の訥辯をも顧みず、外に能がないから、先づ御話をする位なことが關の山である、而して今日の如く故人に付て御話することは私の大變欣びとする所であります。

二

只今、田子會長の御言葉にもあつた通り、昨年、而も此同じ處（東京小石川植物園内集會所）で田中館博士と共に後藤さんと昔話をされた。其席に御居になつた方で、御聞きになつて居るかどうか知らぬけれども、頗る興味ある話であつた。寧ろ青年時代の話と云ふよりは、幼少の時代の話があつたのであります。諺に「三つ兒の心百迄も」と云ふことがありますが當時後藤さんは七十二歳であられたが、其七十二歳の老人が、自分が實際若い頃の心持で打ち解けて話され

江清月夜人

大正九年
不眠の子あり
利子

後藤伯の筆蹟

た。段々御話を重ねて居る中に、子供の時の考と云ふものは馬鹿にならぬものだ。子供の時の考、感じと云ふものは寧ろ始終我々の意識になつて居るものだ、さうでなくちやならぬものかと云ふやうな、少くとも私はさう云ふ教訓を受けました。まして其の子供が段々成長して相當な青年になつた時代には、一層心に浮ぶ時代の感情と云ふものは捨つべきでない。尊重しなくちやならぬと云ふことを、私は深く其の時に感じたのであります。當時、即ち、丁度一年前に、此處に來られて御話になつた田中館さんは、今御承知の通り外國に行つて居られます。一年前のことを追想して何とな

く……一人残つたと云ふのは、言葉が或は當らぬかも知れませぬけれども、自ら淋しみを感ずるやうに思はれます。

四

三

私は後藤さんとはざつと三十年來の交りを辱うしたので、どうやら、何か斯う、特別に深い關係でもあるが如く世間で言つて居る人もある。先達つても鶴見祐輔君が何かの雑誌に書いたものゝ中に、兄弟の親しみのあつたと云ふことがありましたが、或る意味に於ては、私は一方ならぬ深い關係を結んだのである。それは政治の方面でもなく、活動的の方面ではないが、何となく唯思想上大いに同情すべき所があつたのであります。伯の活動の多くの動機、其の心持、其の感情に付ては聊か此事が出来たと自分は信じて居るのである。唯齋藤さんのやうに、昔のことは存じませぬが後藤さんが四十頃の最も盛な時分に私は初めて御目にかゝつた者で、其の當時の考、それから圓熟せられた七十代になつてからの考も、恐らく段々押して行つて見たならば、十歳或は

六歳三歳頃に、自分の意識には残らなくとも、事に當つて不意と感じた所の其の感情、それが段々熟して、花となり、實を結んだものと思ふのであります。

四

私が伯に初めて御目にかゝつたのは、今申した通り三十年ばかり前である。岩手縣人と云ふから同縣人、同郷人のやうに思つて居る人もあるけれども、私は長く北海道に育つた者で、北海道の學校を出てから直ちに外國に行つた。歸つてからは又北海道に行くと云ふやうな關係で、東京に居る人には中々御目にかゝらない。岩手縣人と言ひながら私の岩手縣人として残つて居るのは誇か、恥か知れませぬが、故郷の訛りが今尚ほ残つて居ると云ふだけで、折に墓參に行く位なものであつて、諸君とも自分で望む程の御付合ひもないやうな譯であります。日頃遺憾に思つて居ります。さう云ふやうな譯で故郷の人にも能く知らず、又東京に居られる方にも御付合する折が少し、後藤さんなどは、實は一向名も知らない位であつた。

所が私は長い間病氣をして、其の時あの有名なベルツと云ふ醫者の大家に診て貰つたら、此の病氣は神經を惱ましてはいかぬから、成るだけ神經に觸れない、興奮させぬやうにしなければならぬ。それには「一番宜いのは、若し君が出来るならば外國に行つてしまつたらどうだ。日本に居て新聞などを見て神經をいらつけるより、亞米利加にでも、英吉利にでも行つた方が宜くはないか、その方が早く癒はる」と云ふから、外國に行つたのです。さうすると、五年掛かると言ふ病が、約一年で段々好くなつた。併し其の病を尙ほ善く養ひつゝ、亞米利加に居つたが、突然故國の、時の農商務大臣であつた曾根と云ふ人から手紙が來た。見ると「臺灣に兒玉と云ふ人が總督になつて居る、今度後藤さんと云ふ人が民政長官となつて行くに付て、お前を局長に用ひたいから行つて呉れぬか」と云ふ話であつた。是は人違ひだらう。私としては曾根と云ふ人も知らないし、兒玉と云ふ人も、亦後藤と云ふ人も能く記憶して居らない。ほんやり名を聞いた位に思つ

て居つた。で、直ちに「それは私の分ではない人違ひでせう」と云つて亞米利加から斷つた。所が曾根と云ふ人は又手紙を寄越して「確にお前に頼むのだ、間違ひはない」と云ふことであつた。それから又「實は私の親同然にして居る者に太田と云ふ者がある……」太田時敏と云ふ爺さんは、或は諸君の中に御承知になつて居られる方があられるか知れぬが、是は私と違つて最も純粹の岩手縣人、岩手縣人の生粹と云ふ者でせう、殊に言葉などに至つてはまる出しの岩手縣人でも天保時代の盛岡邊其の儘の佳人であつた。先づ岩手縣人の標本とでも言はれる人で、舊南部藩の家令で、昔から其儘に保存されて居るやうな言葉遣ひをして居た。是は私の實父同様で私は實父を早くから失つたので、此の太田を親として居る。こんな關係上私の親同然にして居るので、是が年を取りまして、年を取れば遠くに遊ぶことを望まない、と云ふ理由で御斷りしたが、曾根と云ふ人は相當しつこいと見えて、後藤さんが推されて居るからとか……私は其人を知らぬけれども……又手紙を寄越されて「太田と云ふ人は頗る健全だから、さう云ふ心配はあるまい是非行つて呉れ」と云ふことで、それからもう一度斷つた。「親が健全かも知れないが私がさう云

ふ臺灣などに行つたら健康が氣遣はれるから御免蒙る」と云つてやつたが又三度目に「臺灣は君の思ふやうな不健康の所ではない、健康に宜い所だから」と三度もさう言はれたからは是は考へ物だ、人違ひでもないやうだと……其時不意と想ひ出したことは曾つて私が北海道に居つた頃に私の友人で同窓である頭本元貞と云ふ男が東京に居つた……今でも居りますが、此の男が伊藤博文さんの秘書官をして居つたことがあります。それで私が何時だつたか頭本に聞いたことがある。

「僕等みたいに北海道の隅つこに引込んで居ては天下の名士に逢ふことが出来ないから、斯う云ふ風にして無爲に朽ちてしまうものだから、君は東京の本場に居つて、色々な人に出喰はすだらうが、一體どんな人を偉いつて言ふんだらうね、伊藤さんの所には天下の巨星が集つて来るに違ひないが、どう云ふ人を偉いと思ふね、どんな人が目立つかね」と云つた。所が頭本の言ふのに『確に伊藤さんの所には色々な乾分もあれば、乾分でない人でも中々名士將軍達が集つて来る。其中でさうだね、先づ目立つと云ふ程の人は分つてる所二人あるね。其一人はあの星亨と云ふ男だ、是は一寸見ても異彩を放つて善いこともするが、悪いこともする、何となく當り前の人とは

違ふ所がある。それからもう一人は今から勤めたら、眞面目にして居たらきつと立身するだらうと思つてる、それは内務省の衛生局長をして居る後藤新平と云ふ男だ。君の故郷の人のやうに記憶して居るが、あれは、何でも餘程懶巧らしいね、役人でも普通の型とは一寸毛色が變つて居るかも知れない、まあ僕の見る所目立つ男と云つたら此二人だらうね、」と云ふことを曾つて頭本が私に話したことがある。そんなことで後藤新平と云ふ人はほんやりと記憶して居つたのである。三度も繰返して手紙をよこして來たので、「是だけ自分を推すものなら一つ行つて男を揚げて見やうか、使はれて見やうか、」と云ふ氣が起つたので「折角の御推薦だから参りませう」と亞米利加から返事を出して歸朝することに決心し、臺灣行を約束した譯であります。

六

さうして日本に歸つて來ると、神戸に後藤さんの秘書官が來て居つて、新橋に着くと又外の秘書官が迎へに來て、「是からすぐに來て呉れまいか、後藤さんは自分で出迎へをしたいのであるが

インフルエンザの爲に熱が大分高いので寢て居る、もう一週間ばかり寢て居りますが、一刻も早く君に遇ひたいから、失敬だが自分の寢て居る所にすぐ来て呉れと云ふて居られたから、すぐ停車場から来て貰ひたい」と云ふのでしたから、私も折角宜い椅子を興へて呉れた人に、一刻も早く逢つて見やうと考へたから、秘書官と同伴で後藤さんの麻布の宅に行つたのである。さうすると果して床に寢て居られる。近寄つて御目にかゝつて見ると、ベッドに寢て居られる。其姿が成る程其顔色を見ても人竝でない。頗る男振りの宜い人だ。「是は宜い顔の人だなあ」と女ならざる私もすつかり惚れくとした程であります。それから先生寢て居つて「誠に失敬した出迎へにも出ないで、甚だ濟まなかつた、貴下も歸つたばかりでまだ家にも着かれないさうだが、早速用談をしやう、貴下は一體役人になる積りかね」と言はれた。私は一寸不思議に思つて「それはどう云ふ譯ですか、臺灣總督府に行く」と云ふのは役人になるのではないのですか、「それはさうだ、或る意味に於ては役人だけれども、何僕の言ふのは官制に極まつて居る文官になると云ふのかどうかと云ふのだ。」「實は私は甚ださう云ふことは疎いので、文官でない役人が別にあるのです

か、」と問ふと「それはある、詰り雇とか何とか云ふやうな者で囑託と云ふやうな者がある、囑託なれば俸給の方は貴下の望むだけ幾らでも上げる、併し文官となると官等も俸給も極まつて居る、貴下の履歴を見ると文官になるにはどうしても技師で五等、俸給の方は四級でなければ採用出来ないが、併しそれでは餘り氣の毒だから、囑託になれば君の望むだけ上げるが、君は幾ら位欲しいね。」と言はれて私は「私は役人になつてから言ひませう、外に何も私は身の片付けやうがないから、月給取りの外ないだらうと思ひますから、何でも宜い、役人でも、何でも其處が廉いとか此處が高いからと云ふことは望まないから、まあ文官と云ふのを望みませう、」と云つた所が、「それでは宜しい、そこで文官とすると俸給は幾らくだ、」「さうですが宜しうございます、」「併し是では餘り少いからどうも折角なんだから三等位は上げる、月に千圓位は出しても宜しい」その時分の……三十年前の千圓ですから喉から手が飛び出しさうに欲しかつたのですが、私は無遠慮にきつぱりさう云つたのです、「私は女郎でもあるまいし金で身賣る考ではないから金のことはい加減にませう、私は唯豫ねてから兒玉さんは面白い人と聞いて居り、相當偉い人と聞いて

て居る、それで私は使へやうと思つて來たのです、金の話はまあ止めませう、「斯う云ふと、先生
 寝て居て眼をつぶつて暫く考へて居られました。さうして「分つた」是が大切なんだ、御苦勞
 だが、君が家に歸られる途中に兒玉さんの所に一寸寄つて呉れ給へ、さうすると兒玉さんもきつ
 と同じ間ひを發するだらうから、其の時は今と同じ返事をして呉れ給へ、」と云ふのでありました
 が、私は「宜しうございます」と云つて別れたのが、それが一番最初の會見であつたのであり
 ます。

七

それからと云ふものは、先刻御話する通り、後目のことと云ふよりは寧ろ人事と云ふか、思想の
 方面に付て常に私は教訓を受けたのであります。後藤さんの特徴と云ふのは能く一般に頭が宜い
 やうに思つて居る人が多いけれども、私は頭の宜いのが特徴だとは思はぬ。私の見る所では能を
 以て特徴とするのではなく、それは宜いのは人並よりは宜いか知れないけれども併し頭の宜いこ

とを言ふたならば寧ろ兒玉さんの方がずつと上だと思ふ。例へば技術の如き點のことでも、港灣
 の修築のことでも或は私の殊に與つて居つた殖産のことでも、臺灣の製糖のことなどでも、藍の
 栽培のことに付てもさう云ふやうな技術的な話をしても、まあ兒玉さんに話をすれば十分で分る
 ことならば、後藤さんは矢張り二十分位は掛つたやうである。尤もさう云ふやうな話を私が聞い
 たならばどうしても、二時間位は掛ると思ふ。後藤さんは吾輩に比べれば、高位にあつたけれ
 ども、兒玉さんに比べれば、矢張り頭の分り程度、理解の程度に於ては大分下つて居るのでありま
 せう。兒玉と云ふ人は其點は偉いものだ。まるで電光のやうにピカ／＼する鋭さを呈して居て、
 身體全體が火花であるかの如くピカ／＼して居つて彼の話ならどんな話でも聞いて居つて能くピ
 リ／＼と其理由を述べ出したら、其の整然として居ること驚く程であつた。頭の宜いのでは井上
 馨と云ふ人があるが、此人は兒玉さんのもう一つ上手であつたかも知れない。負けず嫌いの兒
 玉さんは「何それ井上さんは私より二十も上ですからね、御年も矢張り古いですよ」と云つて冷
 やかして居つたが、其の態度を見ると井上さんは、兎に角實に見上げた頭の宜い明瞭な人であつ

た。所が後藤さんはそれ程ではなかつたけれども、後藤さんは醫學を學んだだけに、妙に學術的傾向がある。傾向と云ふと何か物事をやるに悪く言へば生じつかと云ふので、善く言へば兎に角物事の考へ方が秩序と云ふことを重んずる趣きの人で、獨逸で學問をやられただけであつて、常に何事かをしやうと努める風があつたやうである。果してそれが、一々當つたかどうかと云ふことは疑ふけれども、努めやうと云ふ氣分はある。若い時に書かれた本がある……今は誰も讀みやしないでせうが、それなどを見ましても、如何に學術的なことを努めたかと云ふことがありありと現れて居る。此の學術にちやんとは當つて居らぬ氣は……少くとも僕の眼で見るのだから、それは當らぬかも知れないが、僕は何時も後藤さんに向つては「貴下の傾向だけは實に私は感心する、併しそれ以上餘り言はぬ方が宜いですね、すぐほろが出来ますから……併し其傾向だけは太いに御互に尊重したいものですな」と云ふことを屢々言つた。

後藤さんは頭の方面に於ては大いして善いと云ふことはない。併しあの人は情の人であつた。感情だから色々なことに氣が付き、各方面をあれも是もと云ふ風に多情と云ふか、感情の種類が多い人である。それを頭で統一しやうと云ふ其處に彼れの苦心が存在する。其處が頭の用ひ所である。故に伯は能く言つて居つた「私の大風呂敷と云ふけれども、やつて居る所を俺がぐつと引張ると何もかもずつと一緒になつて引巻いてしまふよ」と云ふたが、實際其通りであつたのである。併し其の中に統一は何處かに在る。自分が説明出来ないけれども本能的に統一のあることを感じて居るのだ。議會に於ても何か妙なことを言ふが、それは所謂政治家などから見たならば、實に突拍子もない纏まらぬことを澤山言はれて居るに違ひないのである。兎に角伯は多情の人であつた。其情の中に最も先生の心を動かしたものは惻隱の心の現れである。憫みの心である。何と申しませうか情心と云ふのか、他人を不憫に思ふ、思ひ遣りの深い、是が何より伯の特徴であると思ひます。何事によらず随分偉らさうなことを言つて威張つても、強さうなことを言つて居るけれども情に脆いこと夥しいものであつた。どれだけ世間を騒したか知れないあの相馬事件に

於て、犯人に與へた金が少し位なら兎に角、相當の金を與へたのは何故かと問ふた判事さんに對して、伯の答へたあの様子を見ても、又阿片の問題に付て當時帝國大學の醫學の先生達が口を揃へて臺灣の阿片制度を非難した……而も是は後藤さん獨り得意とした政策であつた。之に付て非常な非難を浴びせかけられた。中には國賊なりと云つた程で、其時などでも、一時は非常に感情家だから痛く感ぜられたやうであつたが、其後は等の人々に對する態度の如きは實に見上げたもので、最早昔日の傷手を忘れてしまつたやうである。併し眞に忘れたかと云へば、決して忘れて居るのではありません。確に彼れの記憶には残つて居るが、さう云ふ一時的感情は何時もあの人の歴史的の事實と云ふやうに看做して客觀的に見て、唯之を恨みの爲めなどとは間違つてもしない。其處があの人ので量の大きな又愛すべき所で、先刻も話したやうに、一目見て惚れぐとすゝる所が其處である。彼れは色が白かつたかと云へば、如何にも色が白かつた。鼻筋が通つて居たかと云へば、それを通つて居た。眼がパツチリとして居つたかと云へば、それもさうだ。それはもう申分のない人相を具へて居つたけれども、それ以上に伯の心持が一點汚い所がなかつたと云

ふことが彼の一番の特徴と言はねばならぬ。

九

臺灣に居つた頃、何とか言ふ其時分廳長をして居つた人で、鹿兒島の人でしたが、人相を見ることが中々上手だと云ふので評判の人があつた。頻りに色々な人の人相を見ては、能く當てると云ふので評判でした。此人の私に言ふた事がある。君、後藤さんの人相をどう見るね、あの人はあんな正服……（臺灣の正服です）金びかの正服を著て居るのは似合はないよ、本性に似合ふ様子と云ふたら、先づ、墨染の衣だらうね、「それはどうしてだ」と問ひ返すと「いや、あの人の腹の中は、決して政治家でもなければ、學者でもなければ、勿論實業家などでもない。先づ坊さんが適當だね、何處となく脱俗した心持があるからね」と云ふことを言ふたことがある。後藤さんにはそれ程、英語で言ふとデタツチと云ふか、俗世間を離れた、世の中から離れて居るやうなデタツチと云ふやうな風がある。僕等みたいに、朝から晩迄、一室に引込んで讀書に丹念して、

何處から見ても交際が極く少い。訪問は御免蒙ると云つて、書齋にばかり居る連中ならばとも思はれるが、それでも難しいのにあの人みたいに本當の世の中に入つて俗なことを……最も俗なことをやつて居る中に居りながら、それと離れて居る。デタツチして居る。汚い仕事場である世の中の不純の處で、其處には金の關係もある。婦人の關係もある。色々なことが著いて廻つて居るのであります。斯うした泥水の中に在りながら、あの人と一寸でも話をしただけでも、尙ほ、ずつと上ほると、あの人考だけは、別の處にあるやうに、デタツチしたと云ふ處に、あの人偉さがある。何だか、常に泉が盡きないで、湧き出て居るやうな感じがするのは、其處ではなからうかと思はれます。

10

何時か外國に一緒に行つた時に、伊太利のフローレンス市で、私が石像を買つたことがある。其の像は大理石で造つてあつて、ボツク即ち英語のピース、平和の像と云ふのを買つて兒玉さん

の土産に持つて行つたことがある。今尙兒王神社にそれが供つて居るさうであります。其時に後藤さんは慈善の女神の石像を見付けられて「君此像は氣に入つたが何の像たらうね、」と云ひながら刻んである文字を読んだが、獨逸語は少しばかり讀めたし、英語は尙ほ少し讀めたけれども、兎に角少しは讀める。「君、カリタスと云ふのは何だ、」「ラテン語は知らないけれども、カリタスは英語のチャリテイで慈善と云ふことだ、」「さうすると是は日本の福の神様と云ふやうなものだね、是は宜いものを見付けた、呉れ給へ、」と云つて店を出てからも絶えず「宜いものを見付けたなあ、今日は宜い物を見付けた、あれは僕の神様だよ、僕の生きて居る中に一番やりたいと思ふものは慈善事業だからね、無論僕の終生は慈善事業だからね、今日は宜い物を見付けたなあ」と欣んで居られました。其石像が日清戦争の後に彼の償金を二億元日本に取つた。あの時に伯は「あの中五千萬圓だけ私に下さらないか」と云つて、時の政府に迫つたことがある。「何をやるのだ」と云ふと「僕の考で巧い事をやる、五千萬圓ばかり欲しいがね、あの内幸町の兩側に、今の議事堂のある所」あの道の兩側にずつと大きな堂々とした建物を建て、さうして慈善市を設け

て癡兵だとか、孤兒だとか、或は盲啞者だとか、不具者と云ふやうな總ての慈善事業を一緒にして其處にすつと並べて見たいものだ。さうして誰でも彼處に來たら、噫！成る程日本の天子様は有難いなあ、人民保護の大御心が皆此處の中に入つて居るのだと云ふ皇恩を目の前に見えるやうに努めたい、それでなくて社會問題なんか到底解決出來やしないよ」と云ふやうな長い間の意見を述べられて、尙ほ「君此問題に付て何か見たならば或は聞いたならば材料を呉れ給へね」と云ふことを幾度とはく相談を受けたこともあつたが、さう云ふやうなことは先生の最も得意とする所であつた、慈善事業の爲に五千萬圓もの大きな建物を建てたいと云ふ共心は惻隱の心の外に何物でもあるまい。言ひ換へれば人を助けてやらうと云ふ心である。それだからこそ今のカリタスの例を見て「俺の神様だ」と述べられたのである。さうして先生のする事なす事、總て何であるかと云ふと「可愛想なものだ」と思ふ其心から出て居るものと私は思ふのであります。

常に困つた書生さんなどは後藤さんの處に無心に行くと、まあ最初の一回目は叱り付けて「青年がそんな風でどうする」と云つて居るが、「いゝえ實際、此三日ばかり何も喰はぬで居る」と云

ふと涙をほろ／＼流して、「それ程迄か、まあ氣の毒だ」と云つて二三十圓は出して呉れる、「貴下に行く」と泣き二十五圓なんださうですね、私の所にも多勢來ますが、私は二十五圓所か二圓五十錢も出せないんだから、貴下の所にやつて二十五圓代泣かせるやうにしませうか」と云つたら、先生「いやそれは困るね」と言つて笑つて居られた。困るが、どうか私は知らぬけれども他人を救つてやると云ふ伯の泪脆いことの一例であります。

二

泪に脆いことゝ云つたら、何時だつたか何かの集りで築地の料理屋に政治家達が集つて餘興に講談を一席やつた。私も實は其時には泪を催したけれども……兒玉さんも居つたし、後藤さんも居つた。泪をほろ／＼流して泣いて居る。後藤さんの泣きと云ふことを餘り話すのは此處では止めるけれども……兎に角、兒玉さんも泣きの類で南部伯が戦死された時などは……伯爵が出征される時に丁度兒玉さんが彼處の參謀本部の總長をされて居つた……其時に行つた話をした時な

とは、私はそんなぢやないと思つたが、斯う云ふ風にして南部伯が出發されましたと云ふありの儘の話をする、先生何百人の客を前に控へて泣いて居る、話を聞いて時間が切れると「もう一寸！其後はどうしたね、一寸で宜いから聞かして呉れ」それを聞かうとすれば、ほろ／＼涙を軍服の上にこぼして拭かうともしない。唯目に涙一杯にして居つたことを記憶して、他人にも話したことがあります。一體兒玉の眼に涙を溜めたのを見たことがあると云ふことをお話ししたが、それに優るとも、決して、劣るまい泣きは後藤伯であつた。で、今の一寸した宴會に行つて色々話した。あの今の淨瑠璃を聞いて居りながら、私も淋しくなつたから、傍に坐つて居た藝者に「何だか心細く哀れな物語りだね、どうだ兒玉さんなども泣いて居るぢやないか、此小僧は泣き蟲ですからなあ、」と云ふと藝者は「けれども、もつと／＼泣きは一番の泣きは後藤さんですよ」と云ふことを言つて居つたことがある。要するに伯は泪の人であつた。それが段々に年取つてから一層さうなつたかと思はれるのであります。亡くなられる少し前に、ボーイ・スカウト・少年團に迎へられた時なども、あの勇敢ななりをして居りながら、唯ほろ／＼泪ばかり流して居られた。何

を感じられたのか知らぬけれども先刻田子さんの言はれたやうに、學生會に正式に御案内の際、伯が申された事に、露西亞の交りも大事だが青年も大事だ」と言はれた。其心持であつたことと思ふ。此小さい子供等が、是が、後日此日本國を背負つて立つのだ。又其子供等の中には相等苦しい者もあらう。苦學して居る者もあらう。親のない者もあらうと云ふ風なことに頻りに氣を廻す人であつたのであります。

二二

後藤さんは人生を見ること何時でも裏を……悪い意味でない裏を察してやるやうな風があつた。誰に逢つても伯だけが其處に私と頗る話の合ふ故であつた。他の人に話すと笑はれるやうなことを、斯う云ふことがあつたとか、斯う云ふ話があるとか云つた哀れな話をする、非常な興味を以て聞かれた。其話はどうなことがと云ふと政治家には政治の大きな問題があるかも知れぬけれども、私は一向何にも知らない又何處の者だか分らぬやうな婦人などが、私の家に徨ふて來

て其苦しみを訴へる人が折々ある。そんな人の話でもすると非常な興味を以て「君、それはどうしたね、どう云ふ人だね」と云ふ風で、恰も大臣を推薦する時に「一體其候補者の経歴はどうだ」と云つて、質すが如く其田舎娘のお母さんのことや家族のことやら迄も根を掘るやうに、それで宜いのかね」と熱心に聞く所の、其人生の裏、人生の裏と云ふのは人生の裏に含んで居る所の泪である。是が伯の感情の基礎をなして居つたやうに思ひます。

曾つて伯の奥様が長い病氣をなされてもう危くなつた頃に……是は私が直接見たことではないけれども側に居つた人の話を聞いたのです。當時後藤さんは内務大臣をして居つて非常に忙しいので、奥様の所には度々折を見ては看護に向ふのでした、或る時奥様の床の側に行つて後藤さんが「どうした」と容態を聞いて居つた時に……是は若い御婦人の方の前で言ふて、うっかり眞似されては困るが、奥様が後藤さんの顔に寄せて頬を斯うほとくとたいて「夫の後藤新平……」と言つて「宜い所もあるけれども唯感情に走るから過ぎないやうになさいよ、此處が危いですよ、しつかりしないと感情に走りますよ」と云つたと云ふ話を聞いて居ります。

數十年間一緒に暮して居られた夫人の見たのも要するに其處だ。私が三十年間御付合をして見たのも要するに其處だ。泪の人、感情の人である。奥様が亡くなられた時のことを見ててもさうであります。丁度亡くなられた時私が後藤さんの家に行つたら、二階から下りて來られたので「どうです」と問ふた所が「あゝ逝つたよ、けれども兼ね／＼教へて置いた通り未練なく大往生をして呉れたよ」と、斯う云ふことを言はれました。「兼ね／＼教へて置いた通り、何の未練なしに大往生をして呉れた」と云ふ其言葉に、どれ程の愛情と誠意が含んで居るのであらうか、と云ふことが我々察することが出来る。

後藤さんが亡くなる時が來たから亡くなるのが當然であつたらう、私は寧ろ後藤さんと云ふ人は最後の數年間死地を求めて居つたとは豫期されなかつたのです。疊の上で死ぬとは思はなかつた。曾つて斯う云ふことを言はれたことがある。今の商科大學の昔校長をして居つた名校長とし

て有名な人で、名は何と言はれたか忘れたが、有名な義侠人と稱せられた人があつた。世の中には往々自分自ら義侠人のやうな眞似をする人があるが、あの人は詰らぬやうな人だが中々そんな人ではなかつた。其人が相馬事件が済んだ後に、後藤さんの家に行つて玄關に來ると「御這入なさい」「いや一寸逢ふと宜いのだ、長い間あんな獄に入つて逢はぬものだから一寸見に來たのだよ、」逢はないつたつて前と何も變ることはないよ、」それなら元氣で結構だ、私は用なんか何もないがね、唯ね、君も一體疊の上に於ては死にさうがないから、あんな所に入つたのも一つの因縁でせう、併しそれだけ元氣であれば幸ひだ」と云ふことを言はれたことがある。其御當人は自分はあるやうに世を去るとは思はなかつたらしいのであります。

露西亞の旅行なども非常に無理をされて居つたやうであります。露西亞に行かれる頃、私は築地の病院に居つたら見舞に來られました、其時などは餘計に歩けもしない様子でした、それで「行けるんですか、遠方の旅行が出來ますか」と問つた所が「まあ大夫の積りだ」と言はれたが之に依つて見ましても伯は何時も命賭けでやつて居ると云ふ決心のあつたことは確に察せられるのであります。

のであります。

一四

日本には、政治家も、事業家も多いけれども、さうしてさう云ふ人に、私は餘り親しく御付合はしないからう、つかり判斷などしては相濟まぬことで、他の人に後藤さんに匹敵する人はないと云ふことは憚るけれども、少くとも私の知つて居る狭い範圍に於てはあれ程純粹な考を有つて邪と云ふものを抜きにして、さうして世と云ふものからデタツチして國事のこと、それから人を救ふてやること、さうして哀れな者を嘆き、哀れな者の爲に心を勞した人はなかつたらうと思ふ。それが即ち彼の全國民をして何となく親しみ、あらしめたのでなからうか、實にテレビカルな話だ。忙しい中に學生の會合に出て行かうと云ふ心持、ボーイ・スカウトの爲に出て行くと云ふ心持、伯なればこそ出來ることであらう。

思ひやり深く、哀れみ深く殆ど人神の情に達した人であるけれども、それが伯の意識した目的

でなかつたと云ふことは、聊か彼を知つて居る者あらば皆認める所であらう。彼の偉大なる根柢は彼の人情味の深い所であつたやうに思ふのであります。それが爲にこそ彼の知つた人は一層今伯の亡きことを淋しく思ふのである。「伯が居つたならばなあ」と云ふ詰り伯をミツスする……ミツスと云ふ字は日本語には翻譯がないから物足らないのであるが、何等か若し彼が居つたならば、そんなこともなかつたらうに……斯う云ふ不都合はなかつたらうにと思ふ、「今尙ほあの人あれかし」と彼をミツスする。其處に人間の眞からの人格が存し、此ミツスすることで人間の眞價が極まるものと思つて居る。此ミツスされればされる程、其人が偉大なのである。居ても居なくても宜いミツスされない人間と云ふ者、さう云ふ人には如何に小さい範圍に於てもなりたくないものだ。自分の一家に於ても親が亡くなつたら「私の親父が亡くなつて宜い、あゝ云ふ飲んだくれてやかましやは居らない方が却つて宜い」などと一家に思はれるよりも、假令親でなかつたにしても友人でも宜い、或は下女にしても下男にしても何事かに當つて「あれが居つたならばなあ」と居るべき主者が居らないと淋しく感ずると云ふ。其ミツスと云ふ、私は情と云ふことはさう云

ふ言葉ではないかと思つて居る。情ないやうに何だかさう云ふ氣分がする。「あの人が居れば宜かつたになあ」と、其氣分即ちミツスする、即ちそれに依つて人格を量るものではないかと思つて居るのであります。後藤新平伯の如きは正しくさう云ふ人であつたと思ふのであります。

私は唯個人としても、亦個人としてのみならず國民の一人としても後藤伯の逝かれたことには今尙ほ……さうして後年を経れば経る程、伯をミツスすると云ふことは自分の既に覺悟して居るやうな譯である。伯を知らない人でも何となく彼をミツスするであらうと思ふ。在京岩手學生會も昨年伯を迎へたのが、今春伯の御出席なきことを何となく物足らなく思はるゝと云ふのが、取も直さず伯をミツスするの證明である。此觀念は嘗に在京岩手學生會ばかりではなく日本國擧げて伯をミツスするものであらうと思ひます。(拍手)

この一篇は昭和四年六月二十三日在京岩手學生會春季大會の席上に於て新渡戸博士の述べられた速記である。速記は岩手縣盛岡市出身古津四郎君の手に成つたもので、校訂は拙者自ら之をなした。發行は新渡戸博士の御同意を得たが、文章はすべて私の責任である。(田子一民)

故郷

新渡戸 稻造

故郷ほど人を引きつけるものはない。今日も、故郷から東京に出て居る學生の集會で、後藤子爵や、田中館博士は、學生の爲に、故郷のことを細々と話された。その話される心の裡には、何とも云ひ難い親しみ、強みが躍動して居るかの様に見えた。又青年男女達も、折柄の大雨をものともせず、多數集つて來て、引きつけられる様に、吸ひ込まれる様に、熱心にその話にきゝとれて居た。それは何の爲めであらう？

私は獨りで質問して見たのである。

まさか、雨の植物園の静かな景色に心を静められた丈けではあるまい。そこは、同じ故郷の人であると云ふ或るものが、存在するからであらう。

それにしても、故郷とは何か。

故郷とは生れた處か？ 旅行した處か？

故郷は恐らく生れた處であらう。私は八歳のとき、故郷を出た。三つ児の魂百までもと云ふ諺がある。八歳まで故郷に住んだ私には、恐らく故郷の魂のなにかと存在するであらう。況んや百歳にも達しない六十六歳の私であるに於てをやである。

故郷はなぜ戀しいか。なぜしたはしいか。

生れた處はなぜ戀しいか。生まれると云へば、母親が旅して、その旅行中に生れて、産後十五日間も、その地に赤坊として、たゞ空氣を吸ひ、母乳をのみ、別に、その地方の食物をもとらないものでも、生れたその地方はなぜなつかしいのか。戀しいのか。

生れた處に永く住んだ人について、バックルは「地方地方は空氣も異なつて居る。それが人體

にも影響を及ぼすのである」と云ふ様なことを言つて居る。空氣ばかりではない、水でも、山でも、川でも、風景でも、すべてのものは、人の心にも、又身體にも、大きな影響を及ぼすのである。山川草木、皆人に影響を及ぼすのであらう。此等のものは、人の感情となり、潜在意識となつて居たと云ふ様に、物質的にも、形而下的にも、身體を形成するに至るのである。しかし、この事は理解し得るにしても、出生後、間もなく、旅立つ人についてはどうであらうか。

詩聖ホーマーは何處に生れたか。ホーマーの生れた處は明かでないらしく「ホーマーは我が村で生れた」と争ふ村々が多く、七度もこれが爲めに戦争をしたときへいはれて居る。詩聖の故郷争ひの爲めに七度も戦ひをしたときいては、故郷について心的作用の微妙なことが察せられる。

私は、永く、カーライルに私淑して來た。三十年この方、カーライルの古い住家をたづねた。

古く永く、屢々この舊宅をたづねた。この古家には、婆さんが番人をして居る。この婆さんに顔なじみになる程、この古家に通つた。昨年の如きは、十一月に、その誕生地であるスコットランドに行つた。スコットランドの十一月は誠に氣持のわるい、氣候のわるい地方で、旅行には最も不適當なのである。雨は始終ふりつゞくのである。ある人は「蘇國では、いつもこんなに雨ばかり降つて居るのか」と云つた所が、「イヤ、さうではない、時には雪もふる」と答へたときが、蘇國の秋冬は雨と雪とではれる時がないことを物語るのである。氣持のわるい季節である。それにも拘らず、故國に歸るに當つて、この蘇國に、カーライルの生れた家を探ねたのである。カーライルの生れた家はいとも小さな家で、水呑百姓、土百姓の家と云つてよい。上一室下一室に過ぎない陋屋である。しかし、この陋屋をたづねても、誕生した家だと思へば、感慨無量ならざるを得ない。

故郷はなぜかくまでに人に大きな感動を與へるものであらうか。私は八歳で故郷を出た。しか

し、幼少のとき盛岡の城に官軍が攻めて來たとき、私の宅は御城のすぐ下の鷹匠小路の河沿への所にあつたから、御城はよく見えた。私は姉に負はれて雪隠に隠れて、その有様を見て居た。「官軍は子供を食ふ」と云ふ様なことで、おそろしかつたものである。しかもそれは今日では夢まぼろしの如く、美しく心に残つて居る。

斯くも、故郷の親しいことの一つは、故郷は吾々に何ものかを與へて居る爲ではないか。しかし、吾々は故郷に何ものかを與へ得たであらうか。

ホーマーは『故郷に與へた』たしかに彼は故郷に與へた。ホーマーの故郷は澤山あると云ふがどれか眞の故郷に與へたのである。

ホーマーの故郷を争つて、眞の故郷と信じた人々にとつて面白い挿話がある。婦人は小指を切つて愛する男に與へた。小指を貰つた男は十一人あつた。小指を貰らつた男は、私も貰らうた、私も貰つたと謂ふのであつた。そこで男達は女に迫つて、その不實をせめた。一本しか切らない小指が、十一本もある筈はないのである。女は白狀し「甚だ濟まないことをいたし

ましたが、一本の小指しか切らない。他の指はにせものです。しかし、その中の一本はたしかに眞の指であります」と詫びた。十一人の男は、私のこそ、眞の小指だと謂つて喜んだとの事である。

ホームーの故郷は、何れが眞のものにしても、故郷と稱せられるものにホームーが與へた名譽がある。多くの立派な人々は、故郷に名譽を與へる。吾々は名譽を與へる人のあることを認めるのである。

私達は名譽を與へなくとも、愛情を與へることが出来る。私の追憶でも、中津川があつた。中津川は大きな河であつたと思ふ。今日見れば左程大きな河でもない。時々小堰に雑魚とりもした。今はドブ堰になつて居る。恵比壽饅頭と云ふのがうまかつた。今日たべて見ると、にがい、からいもので、幼少の時には、天下第一品と考へたが、今日では天下劣品と愚口したくなる。しかし、つまらないと思はれるものでも故郷のものとなればつまらないと思はぬのである。岩手の北

部の福岡にまんぢうがある。これは私の非常な好物で、先年瑞西に、態々罐詰にして送つて貰つて食べて居た。女中は私の留守に之を見て、人間のたべるものと思はず、すてゝ仕舞つた。しかも、私は之を好んでたべるのである。湖水の好いゼネバに居つても、十和田湖はよいと思つて居るのである。

斯くの如きは、故郷に對し、愛情を以てすべて理想化して居るのである。故郷に名譽を與へ得ずとも、たしか愛情を與へ得るのである。山、川、草木を愛情を以て理想化し得るのである。私達は私達から、故郷に與へるものは、愛情であり、理想である。

獨り山川、草木を愛情を以て理想化するばかりではない。古い苦しことでも一種謂ふべからざる味がある。私の三代前の祖先は南部花卷の軍學者で、錦の表紙の書を読み、その學をやつた爲めに、時の家老と意見合はず、終に田名部に流罪に處せられ、祖父も亦網奥に乗せられて辱を受け父親も閉門されて座敷牢で死んだ。一向に歡迎されて居らない。父親が、藩の財政に與り、大阪

に借金に出かけて思ふ様にならず、佛蘭人に、南部の絹を賣る約束したが、異人と約束したのが悪いなど云ふのであつたらしい。父は閉門されて居て、裏門に廻つて出入して居た。私は幼な心にも朋輩から、閉門のことをきかれると、これだけはきいて呉れなければよいと思つた。偶きかれても「知らない、知らない」と答へるのであつた。

然るに今日では、當時、心を苦しめた様なことは一切忘れて、凡ては美化され、懐しくもしい感をもつのである。

「人間到る處青山在り」と云ふが、青山は自分をもつてあるいて居る様なものである。青山は之を樂しむ人に屬するのである。

この心、すべて美化する心、すべてを樂しむ心の最もよくあらはれるのは故郷に對してである。この穩かな、美化せんとする心は故郷に對する心から生れて來るが、故郷を同じくする人は初對面でも、一見舊知の如きものあるは何んであるか。それはその人とは初對面でも、お互に父な

り、祖父なり、母なり、祖母なりが、よくその時代時代の人を知つた爲めであらう。新渡戸などとふ姓は盛岡にしかない姓だ。ケンからむ姓だ。しかし、花巻や盛岡にしかない姓である故に、又一層の親しさもますのである。

一方に、世界的の心を養はねばならぬが、故郷に名譽を與へ、少くとも愛情を與ふことも美しいことである。明治二十二年頃の後藤新平、今日の子爵が「國家衛生論」を書かれた。この國家衛生論は、子爵が八歳の頃故郷で奥小姓をつとめ、藩の立派な雪穩を實見したり、須賀川で醫者をやり、雪穩の不潔を改良せんとしたりした郷土心が、やがて「國家衛生論」となり、國家の實務に貢獻せられる様になつたのであらうと思ふ。

故郷は吾々にあるものを與へる。之を培ひ、はぐみ、之をそだて、之を故郷に與ふる心持ちを以て故郷に對したいものと思ふ。

後藤伯の思ひ出

在京岩手學生會長

田 子 一 民

昭和四年七月二十三日、在京岩手學生會は春季大會を開いた。この學生會なるものは、岩手縣出身の學生で、東京に遊學して居る者の團體である。この會と後藤伯とは特別の緣因がある。従つて、この學生會の大會に於て、後藤伯爵の追悼の講演を願ふことの決議は、委員諸君によつて舉げられた。そして、その講演者の選定は學生委員に於てなされたのである。齊藤子爵と、新渡戸博士とはその選に入られたのである。學生委員は兩先輩を御訪問申し上げて御出席を懇請した。岩手學生會の特色は、學生委員の自治を以てすべてをすゝめることである。そして、何か先輩と

連絡をとることを必要とする場合に於て、始めて會長の出馬を要求するといふ具合である。この意味で、學生會長とし、又學生會長でなかつた頃から、先輩と學生との連絡係の役をつとめて來た私として、後藤伯についての小感を述べたい。

二

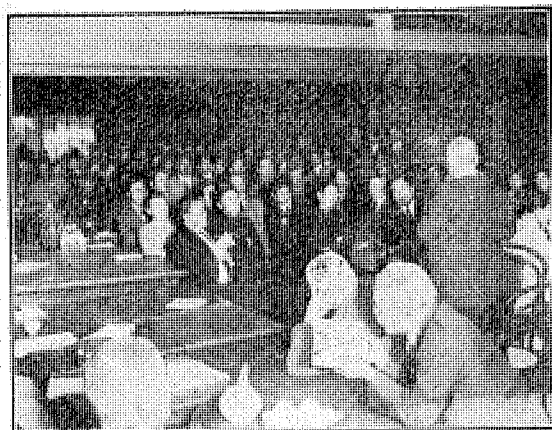
餘程前の頃である。日本大學の古河君と菊池君とが、大崎の私の茅屋をたづねて來られて、「東京に遊學する岩手出身の學生を一團となり、夏季休業を利用して岩手縣下に學術講演を試みたい。相當の費用もかゝるが、その一部に適當な方面から寄附を仰ぎたい」との事であつた。それには後藤さんに願ふのも一策であると考へ、後藤さんを御訪ねして願つた。後藤さんは早速快諾されて、學生達が岩手巡回講演を試みる礎を築いて下さつたのである。今日繼續されて居る學生巡回講演なるものは斯くして始められたもので、始めの一石は後藤さんによつて投ぜられたものである。その後も後藤さんに屢々御目にかゝつたが、いつか私に「學生會全體の世話は私もするが、

學生の個人問題は君で引き受けて呉れ」との御話をされた。思ふに、後藤さんに學生個人としての問題を持ち込んだものと思はれる。

三

後藤さんの肝入で、露國のヨフヘ氏が、日本に來た事がある。その時の後藤さんの活躍は大したものであつた。丁度その頃岩手學生會を岩手會から獨立して始めての發會式を擧げるのであつた。學生委員はその會が明日とせまつた前日、私をたづねて來られて、後藤さんに臨席を願つて呉れよとの事であつた。私は其翌朝早く後藤さんを御尋ねした。門から、玄關まで自動車は並んで居た。二三十臺もある様に見えた。今日は迎も御面會はむづかしいと思つたが、ともかく故郷の學生會の事で御目にかゝりたいと通じた。處が後藤さんは、まだ誰にも面會して居らむが併し眞先きに面會しようとの事であつた。玄關から、各應接間は、千客萬來で、紫煙は濛々として居た。

私は御面會してすぐ要領を述べて、最後に「國家に大切なヨフヘ氏を迎へて居られる際、假令



一時間でも二時間でも青年學生の爲めに時間をさ
いて頂くのは恐縮だが……」と云ふ意味をつけ
加へた。私の心は左様になつて居たので率直に述
べたのであつた。所が

後藤さんは

「ヨフへ氏の事も大切だが、せいねんがくせい青年學生はより大事だ是非行つてやらう」

と云はれて、更に對座して居た私の右側にかかられて（長椅子）

「時に、田子君、ヨフへ氏と今斯う云ふ事を話して居るのだ。」

と細々と帝國の將來を話されたのであつた。後藤

さんは多忙たぼうの裡に約束の如く臨席りんせきされて話して下さつた。學生會、學生は後藤さんの胸むねにどう云ふ様に藏せられて居るか窺うかがひ知り得ると思ふ。

後藤さんは最後の露國行きの爲めに東京驛を出發せられるときも、又無事に御歸朝せられたときも、岩手學生會は歡迎の會をひらき、東京驛頭に會旗を翻して送迎を申し上げたのである。昨年は後藤、新渡戸、田中館御三人は肩を並べて學生會に臨まれたのであつたが（別項寫眞参照）今は世は寂しくなつた。

四

後藤さんは岩手縣出身の方であるに拘らず、しんみりと御話をいたした事は、後藤さんが内相になられた後の事である。それまでは餘り因縁はなかつた。内相になられた後藤さんは極めて元氣なものであつた。警保局の大擴張を試みたり、官吏の海外派遣を試みたり、思ひ切つた事をされた。後藤さんは何の意味かわからないが、鐵道省の役人は「腐つた餡餅」の様だし、内務省の

役人はうめほし」の様だなどいはれた。

内務省に這入られて最も熱心であつたのは救済局の設置であつた。云ふまでもなくその當時の社會事業をあらはす言葉であつた。尙救済局の豫算案は閣議にまで出たが、當時戰爭時代で各國豫算を切りつめても居たし、亦勝田藏相案で郵便料金に値上といふ聲もあつて、救済局設置案は廢案になつて。そのときの後藤さんの憤慨は非常なものであつた。新渡戸先生の追懷講演と思ひ會はせば成程と思はれるふしがある。私をその救済局が成立すれば、その爲に勤務する筈であつた。序に言つて置くことは、今日の中央社會事業協會なるものの前身は、中央慈善協會といつた。この中央慈善協會は、當初の先輩の貧民研究會といふものに端を發して居るとの事であるが中央慈善協會創立當初の資金は後藤さんが出され、それは満鐵から補助されたかの様にきいて居るのである。ともかく、社會問題に熱心であられたことは窺ひ知られる。衛生局長時代に、今日の社會局といふ様な考をもたれて、時の長與氏などにもち込んだものなさうである。工場法の如きも後藤さんは創意され、内務省でやりたかつたが、中々やらぬので、後、窪田靜二郎博士は、

その仕事をもつて、農商務省に行かれたときもきいて居る。後藤さんは嘗て、「窪田君は奇特な人で始終志をかへずに社會事業に盡して居る」といはれた。又社會事業の隠れたる功勞者たる相田良雄君を以て、「あれは寶物だ」などいはれた事がある。「國家衛生論」など全く社會政策的の考を偲ばせるものがある。

五

新渡戸博士は「後藤さんはデタツチト（世間離れして居る）して居るといはれたが、成程、左様にも思はれた。大隈内閣當時、衆議院議員選舉法の調査會があつて、今の潮内務次官が永の病氣で、私は市町村課長から、府縣課長に代つて、右調査會の幹事をやつて居た。その仕事は寺内内閣に引きつがれて、後藤内相は會長で私は幹事をやつて居た。所が、後藤さんの會長ぶりは脱線的で、委員の質問なり、意見なりについて、一々會長が口を入れて、會議に混雑を重ね、議事は一向はかどらぬものであつた。幹事たる私も閉口したものである。全く、議事をやる事などに

慣れて居られなかつた。所が、混亂の議事を終つて大臣室に歸られた際、私は後藤さんに「大臣の議事ぶりは全く下手ですね」といふや「イヤ、委員は皆野暮な事をいふからまづ教へてやる積りでナア」と、いはれて、御自身の議長ぶりなど棚に上げて居られた。

大正六年の解散のあつたとき、後藤さんは内相として「憲政會を不自然なる多數黨」と地方官に訓示し、選舉には自ら監督された。私に名古屋、大阪に隨行せよとの事であつた。私は秘書官向きの男でなく、隨行には適しないといつたが、いや、選舉の空氣を見て居ればよいとの事で、御供した所が、内相選舉干渉に來るといふので名古屋でも、大阪でも、神戸でも、悪口が毎日新聞に出て來る。殊に大阪では、大新聞の記者が、内相の隣室に、飛行將校の名でとまり込み、内相の訪問室等の談話するものを、虚に實にといふか、綾をつけて新聞に書いた。秘書官格の私はこれはやられたと思つた。そして、内相攻撃の記事は峻烈を極めて居た。朝早く、それ等の新聞の記事を、後藤さんに恐る恐る御覽に入れると

「反響はあつていい。矢張來てよかつた！」

と謂はれて、攻撃も、素破抜きも一向平氣であつた。中々超然として居られた。

車中に新聞記者が雲集して盛に話して居る。名古屋から岐阜への車中の如き、大阪、神戸の新聞記者が集まつて來て、中々鋭い質問をする。後藤さん、色々話して居るが、一寸失禮するといつた儘、記者連の中で二十分ばかり、鼾聲雷の如き晝寢を始めたのである。中々デタツチトしたものであつた。役所でも、登省されたと思つて、大臣室に行つて見ると、室に見えない。妙だなと思つて捜して見ると、長椅子でグー／＼と眠つて居られた事もあつた。自在無礙の風格をもつて居られた。

六

水野先輩（鍊太郎）の推舉で、長岡隆一郎君と私と一所に大正七年の春、戰時歐米視察に行つた。長岡君は警察方面で、私は社會問題の視察を主とした。官邸で送別會があり、私達二人は主賓といふ譯だが、後藤さんは、「外國に行くには底の厚い靴をもつて行くことは大切だ。行つた

ならば貸し室捜しをするがよい。貸し室と札のある所には、座敷から勝手まで隈なく見せて貰ふんだネ。十軒も見れば西洋の事はわかるといはれたりした。極めて親切な指導をされたのであつた。

この外遊の際、内相官邸に暇乞に行つたが、後藤さんは御不在で、その儘歸らうとすると、奥さんは一寸是非御あひするといはれて、態々出て來られた。見れば、奥さんは重い病で、床について居られたらしい。色々な御話しがあつたが、餘程御苦しい様であつた。私が桑港についたときは已に長逝されたのであつた。いつ、思ひ出して感慨に堪へない。

郷里の人の頼みで、後藤さんに揮毫を願ふ爲めに朝六時前に電話をかけた。すぐ來といふ事で、麻布の邸に出た。實は一枚丈け書いていただく積りで、他にも頼む用意でぬめを一二枚餘分に持つて行つた。後藤さんは一枚では書き足りないといふ様子で、

まだ、もつてゐるではないか、出し給へ

など云はれて二三枚もかゝれた。もつたいぶるといふ事をせられなかつた。

何か著述されるとすぐ送くて呉れた。若い者を指導するといふ御考はあつたものと思ふ。

大正十三年の選舉には印刷物二千部を送つていたといふ。

京都でなくなれる前後は遊説などで思ふ様に御見舞も出來なかつた。原さんは京都に行かれる豫定で、東京驛でなくなられた。後藤さんは、京都でなくなられて、東京驛に歸へられた。私は、後藤さんの靈柩を東京驛頭に又更に驛前に御迎へしたが、列中の小僧さん、靈柩の通過の際、熱淚滂沱、最敬禮をした有様を見たとき、嚴肅な心になつた。

昭和四年七月十四日印刷
昭和四年七月十七日發行

非賣品

東京府下王子町下十條八〇三

編輯兼發行人 龜卦川健次郎

東京市神田區錦町三丁目五番地

印刷所 合名會社太田印刷所

東京市神田區錦町三丁目五番地

印刷人 太田米吉

發行所

岩手學生會

東京市麹町區三年町二
電話銀座 三四八